平成24年度 兵庫県環境審議会自然環境部会（第3回） 会議録

開会の日時 平成24年12月13日（木）
午前10時00分開会
午前12時00分閉会

場 所 兵庫県民会館 7階 鶴

議 題 「生物多様性ひょうご戦略」の改定素案について

出席者 7名

部会長	福岡 誠 行	委員	角野 康 郎
委員	中瀬 勲	委員	服部 保
委員	佐々木 礼子	委員	上原 利信
委員	栃本 武良	委員	山口 徹夫

欠席者 1名

委員 三好 正文

説明のために出席した者の職氏名

環境創造局長 栃尾 隆 自然環境課長 今里 卓
自然環境課副課長 川北 みゆき 自然環境課副課長 茶谷 達人
* その他、幹事として関係課室より15名出席

会議の概要

開会（午前10時00分）

議事に先立ち、栃尾環境創造局長から挨拶がなされた。

兵庫県環境審議会条例第5条第2項の規定に基づき、会議の成立が報告された。

議事

「生物多様性ひょうご戦略」改定素案について
事務局（自然環境課長）の説明を聴取した。

（福岡部会長）

「生物多様性ひょうご戦略」改定素案について、説明があった。ご意見、ご質問等お願いする。

（山口委員）

資料1改定の特徴の2番目、生物多様性を支えるNPO等との連携の強化で、貴重種や外来種を対象に活動しているNPO等との連携とあるが、資料2に試験や登録の関係から理解はできるが、生物多様性はもっと広い範囲で支えている。限定した書き方より、関係している様々なNPO全体を示すような書き方の方が良い。何か理由があるのか。

（自然環境課）

これまででも生物多様性に関係するNPO等とは連携を図っている。ここに示しているのは、それらに加えてという意味である。言葉足らずの部分があり、限定的なものではない。

(服部委員)

企業の取組でCSR活動を入れているが、NPO等は具体的な名前が出ているが、企業の具体的な名前は出ていない。熱心に取組をしている企業がある。具体的に名前を入れても良いのではないか。

(自然環境副課長)

様々な企業が、いろいろな所で取組まれている状況は把握している。県の計画として、具体的な民間企業名まで入れるのはどうかと考えて省いている。悩ましいところ。

(服部委員)

NPO等は実績として上がっている。結局、行政だけでは生物多様性戦略は出来ない。協力している企業もあり、取り組んでいる企業も沢山あるのだから、取り組むことが当たり前となるように、取り組んでいる企業があれば、実際やっていることを、どんどん書けば良い。今後どうして欲しいということではなく、これまでの評価、結果であるから書いても良いのではないか。

(福岡部会長)

県としては、悩ましいところだが、企業も抱き込んで行くには、もっと積極的に手を打って行くべきではないかということ。

(自然環境課長)

書き込めるかどうか、他の計画も調べてみながら検討したい。様々な企業で取り組んでいることは認識している。この戦略の評価のところを書くべきかどうかを検討する。

(福岡部会長)

掲載できないなら、別の方法も検討する方がよい。

(中瀬委員)

博物館でもある1社だけを記載した時、議論された。この戦略の中で図面(地図)は一つしかない。生物多様性を議論するのに図面上で見ていくと理解しやすい。兵庫県は、日本海と瀬戸内海を結ぶ川があって、標高も高いところから低いところがあり、海域もいろいろな海域がある。そういう地図の上でどんな取組みがあるのかプロットしていったものがあれば、県のこういう所でこんな活動があると良く見えてくる。そんな図面を、付録か参考でも作ると、両側に海があり、山がある兵庫県の生物多様性の特性が見えてくる気がする。ビジョンをつくる時にも言わせてもらったが、そういう総合的な見方をすると、抜け落ちている所も見えてくる。そこへ様々な企業も入れていくと、語弊がなくなると思う。マスタープラン的な生物多様性の総合図のようなものがあれば良い。

2点目、最近、国の研究機関でアセスのデータ化をするところが沢山出てきた。そういうことも視野に入れて、国レベル、特に道路関係は全国のアセスをデータベース化している。そういった既存のデータを上手く活用するというのをどこかに記載してはどうか。

3点目は、P12の「遺伝子の多様性」の3行目、「しかし」以下の記載について、今までやってきたものはどうするのか。園芸業界、種苗業界はこれで生きている。記載がダメだと言っているのではないが、園芸業界、種苗業界に配慮が必要かと思う。

(自然環境課長)

そういうことにも配慮して、自然状態のことを書いている。園芸とか、例えばイヌなどの愛玩動物は交雑が進んでいるが、そういう部分は、遺伝子の多様性の概念から省くつもりで書いている。「種の多様性」の「なお」以下、自然状態における種という場合、同じ地域内に分布し自然交配により子孫を残すことができる動植物のことを指す。「生物多様性ひょうご戦略」の中では、自然状態の遺伝子をどうするか。園芸とか、養殖などの遺伝子の交雑は、生物多様性の遺伝子の概念から省こうとしているが、そういったも

のも管理下に置く必要がるとの意見もある。

(角野委員)

そもそも生態系の多様性、種の多様性の記載も含めて、多様性の説明になっていない。生態系の多様性は、生態系とは何かを書いているだけで、生態系の多様性について何も触れていない。種の多様性についても同じで、種とは何かを書いているが、種の多様性について何も書かれていない。遺伝子の多様性についても遺伝子の多様性について、直接的にわかりやすい説明ができると思う。多様性の説明がなく、いきなり交雑の問題が出ている。3つのレベルの多様性は根本的に全部書き直さないといけない。

(自然環境課長)

例えば、国の戦略の概要版では、遺伝子の多様性はアサリの模様が千差万別なことと書かれている。違う気がするが、どう記載すれば良いのか難しく、生物学的、遺伝子学的に書くと一般の人にはわかりにくい。わかりやすく、なおかつ適確な表現というのが難しい。お知恵を頂ければと思う。

(佐々木委員)

全体的に見て第一印象として、文字が多く絵や図による説明がない。遺伝子の多様性の説明にしても、少し絵があると理解しやすくなる。多様性の話は本当に難しいので、文書だけで表現するのは無理があるような気がする。

先程の地図の話も、A3程度の地図でNPOや企業がどんな取り組みをしている記載すると、手薄な所も見え、兵庫県らしさが見えて来ると思う。そこにプロットするだけでなく、地域の特徴を少し落としていくとさらにわかりやすい戦略になると思う。

もう一点、地球温暖化への対応と資料2の現計画の最後3の(5)に書かれているが、これは他と種類が違い取組状況のどこに出てくるのか、「情報収集の実施」に当たるのか、本文を見て地球温暖化だとか、東日本大震災など自然にかかることが、追加して書かれるのかと思ったが、どう表現されているかといったところで、P75の地球温暖化への対応として書かれているが、これは全体にかかる話で、最後に少し出て来る書き方で良いのか疑問がある。

(福岡部会長)

その前に角野委員の意見、生物多様性の説明を一般の人にも理解できるように説得しないといけない。その辺、知恵を貸して欲しいということ。

(栃本委員)

P11の生態系の多様性、魚類を取り上げ、様々な生態系がある。魚だけが、淡水に棲む魚、海水に棲む魚、淡水でも湖沼に棲む魚もいれば河川に棲む魚もいる。とりとめのない表現になっている。P12の2行目、子孫を残せるので同じ種、種の定義として良いのか、種間雑種は子孫を残さないといわれているが、今現在、京都の鴨川のサンショウウオのハイブリッドは、次の世代もその次の世代も出来ている。中国オオサンショウウオと日本オオサンショウウオと違う種類であるが、戻し交配も含めて、いろんな程度の雑種ができています。遺伝子の多様性も、人の手で移動させ交雑を招くことはいいが、最近、問題なのは、外国のカブトムシなど昆虫の輸入がOKになり、野に放たれ雑種ができています。そういったことは基本的に止めさせる。そこまで強く言わないといけない。この表現だと少し弱い気がする。

(福岡部会長)

輸入昆虫の話は、県としては非常に言いにくいこと。

(栃本委員)

そもそも、ブラックバスなども個人が稚魚を輸入し、人工湖などにばらまいた。日本は動植物の輸出入に関しルーズだと思ふ。なぜそんな昆虫が許可されたのか、不思議で

仕方がない。

(福岡部会長)

そこら辺りが非常に大きな問題だが、環境省が弱いことも一つの原因と聞いた。

(角野委員)

交雑とか、人の手による生物の移動の問題は、遺伝子の多様性とか、生物多様性とは何かに書くことではない。むしろ生物多様性の危機、3つ目の危機として、人間により持ち込まれた生物による危機とあるが、そこに国内外来種の問題として、きっちり記載するのが一番自然だと思う。

(服部委員)

ここで言う交配の問題は、今まで、人間がやってきたこと。園芸、農学では自然状態では交配しないものを交配させて新品種を開発して、そのめぐみを受けて来た。今、角野委員が言われたように、交配の問題とは少し違う。「園芸植物なんかやめろ。」と極論を言っている方もあるが、園芸植物は園芸植物としてあるべきで、園芸とか農学の話は全然違うレベルの話だと。そこには入り込まない方が良いと思う。この文書だけを見ると、今までやってきたことまで良くないのかと思う。

(佐々木委員)

第2章のタイトルが「取りまく情勢」で現状を書くところ。生物の多様性とは何かの説明だけになっている。その後、第3章に行く行動計画で、実際にやっていくこと、対策的なことになっていくのだと思うが、そうすると、ここまで書くだけで良いのか、切り口がない。兵庫県はどういう現状にあるか書かなくて良いのか。細かなところまで読んでいないのでわからないが、一般的な話だけがここに書いてあり、兵庫県では生物多様性がどういう状況にあるかを書き加える必要はないのか。

(自然環境課長)

これは前回説明したとおり、現戦略の第3章「兵庫県の生物多様性」を参考資料にすることとした。今回の改定にあたって、時間的な制約もあり、内容は現行のままとし、本体からは省いている。改定版につけるのであれば参考資料として掲載する。

(山口委員)

私も栃本委員と同じで、生物多様性は、いろいろな所にいろいろな魚がいます、だけでは多様とは言えないと思う。そこには、魚を育むプランクトンがあり、貝類があって、バランスが保たれている。そういう生態系のことを言わないと、多様とは言えない。水の中に魚がいる、単純に魚の種類がいくらいても、そういう感じを受ける。生態系は生物が繋がっている。魚のことだけ書けば誤解が生じる気がする。それだけで生態系は維持できない。

(中瀬委員)

角野委員が言われるように、「生態系」とは何かをしっかりと書く。次に、危機には、どんな危機があるか。もうひとつ、めぐみに関連して、遺伝子の多様性を逆にいけば、これから暑さに強いお米の遺伝子を活用することで、我々の食糧確保に繋がる。そういう三段構えくらいの話、本質論、危機、めぐみに関連する話、それによって多様性を維持することが大事だと。そうすると交配の話も位置付けが出来ると思う。遺伝子のめぐみまで書いておかないといけない。

(福岡部会長)

米で遺伝子のめぐみは書けると思う。そこまで踏み込む必要はあるかと思う。先程の魚なら魚だけで、海だけではない山も含めて、どう上手く生態系で循環しているかといったことを、話が大きくなるが書いていくことは必要だと思う。

(福岡部会長)

企業名を入れるのが良いかどうか悩んでいるところ。単純に言えば企業も抱き込むために、掲載すれば良いと思うが、県側にはためらいがある。

(自然環境課長)

いくつかの企業が、いろいろな所で、例えばフジバカマを増やしたりされている。中瀬委員から提案があったように、地図の中で、加古川のA社がフジバカマを避難させて、それを加古川流域で復元させようとする活動があるとか、そこに具体名を書けるかどうかというのはあるが。

(服部委員)

県の他課では、企業の実名を出している。問題はないのではないかと。別に企業を宣伝する訳ではない、生物多様性の取組を紹介するという事で、兵庫県の場合は、そうやって沢山の企業の方が参加して生物多様性を保全している、兵庫県の特色だと思う。強調すれば良い。

(中瀬委員)

役所の公文書としては悩ましいと思うが、地図を出すことで、それが完成版というのではなく、申し出があればいつでも改定するというスタンスにする。そうすると、うちの「載ってない。」「載せてほしい。」と申し出がでる。活動が呼び水になるような地図にすれば良い。暫定版と括弧書きにする、或いは、何年現在とすれば良い。

(上原委員)

掲載した時に、やっているのに載っていない。そこが悩ましい。中瀬委員の提案のように、暫定版とすることで、どんどん広がるものだと良い。

(中瀬委員)

皆さんの課でGIS化すれば良い。それをホームページ上で、いつでも改定できるようなものにし、最新版にしていけば良い。

(自然環境課長)

企業の森づくりで、企業名を載せているのはあると思う。それは、県と企業と緑化推進協会が協定を結んでいるので載せている。企業独自の取組を、県として掲載していくのは悩ましいところ。少し検討させていただきたい。

(福岡部会長)

この問題は悩ましいところであるが、少し考えてもらうことをお願いする。

(山口委員)

P11の書き出しで、約46億年前に誕生した地球と非常に大きな書き出しになっている。光合成を行う藻類が出現したことによるとあるが、テレビで何々バクテリアが発生したとかいうことを見た。藍藻類だから藻類でよいのか。書き出しなので、間違っているのであれば書き直した方が良いのでは。

(角野委員)

藍藻類は藻類ではない。

(福岡部会長)

その辺は、新しいのにした方がよいと思う。学校の教科書もそうなっているのか。

(角野委員)

バクテリアの一種としてシアノバクテリアと記載されている。

(上原委員)

森林林業のこともP32以下、しっかり書いて頂いて、文書表現はこれで良いのかなと思う。先程も佐々木委員からお話があったように、字数が多くて読みにくいと思う。地図にする、数字は表にする、箇条書きで表すとか、工夫をされてはどうかと思う。

もう一点、第3章のP74の自然のもつ防災・減災効果のところ、表6-1は表3になる。内容についても、[森林]と[水田・畑・ため池]の並びが違う。また、書きぶりも違うので、統一された方が良い。

二点目、[森林]の中で、地上部は雪崩や、落石の発生を抑えてとあるが、「抑えて」まで言って良いか。その辺、調整していただいた方が良いと思う。

(自然環境課長)

森林の部分、海の部分、畑の部分と各関係課に照会して、修正したものをそのまま掲載した。更正をして、全体のバランスを見て、委員の皆様にもう一度確認していただくと考えている。

(角野委員)

全然違うが、改定の方針で数値目標を設定するとある。実際に見るとP89に出ているが、アドバイザーの数、NPOの数等であって、生物多様性保全に関わる数値目標が出ていない。通常、戦略の数値目標であれば、陸域の何%を保全するとか、絶滅危惧種の何%以上に有効な保全活動を行うなどをイメージするが、生物多様性自体の保数値目標が表せていないので、この数値目標は看板に偽りありかと感じる。

(福岡部会長)

書ける数字を掲載したということ。

(自然環境課長)

国家戦略の中でも数値目標はほとんど示されていない。愛知目標が目標になって、それを実現するために、いろいろな取組みをやりましょうと。20の愛知目標の中で、県として、こういう取組みをすると愛知目標が達成できるということを目標にしている。

(服部委員)

武庫川流域委員会では、武庫川に生育している生物全てを絶滅させないという方向を出している。1種類たりとも絶滅させない。そういう数値目標を、兵庫県でも出したらどうか。

(自然環境課長)

P85に愛知目標の12に「絶滅危惧種の絶滅・減少が防止される」とある。それに対し、県として、こういう取組みで愛知目標につなげ、目標達成に向けての姿勢はある。

(佐々木委員)

武庫川の場合、流域の中で絶滅を招かないということで、場所が変わってもそれが保全されるように、ちょっとした仕掛けがある。流域の範囲なら違うところへ移植しても良い。その辺と、この戦略の中で書くべきことは少し違うのかもしれない。

(自然環境課長)

そもそも戦略は、県としての方向性、今後の取組を示すものとする。例えば、絶滅を防止するのに、こういう政策で、こういう取組を進める。ある種が絶滅するとか、しないとかまでは書けないと思う。例えば、A市では絶滅しているが、兵庫県全体では絶滅の可能性はないと言ったものもある。そういう部分になると、国の戦略があって、県の戦略がある、もう少し下の武庫川の戦略があったり、各市の戦略があったりと、そういうことは、もう少し下の段階で決めるものかと思う。兵庫県としては、もう少し下のレベルできめ細かな戦略をつくる指針として、県としてやれるべきことは何かを決めて行くのがこの戦略であると思う。戦略の位置づけとしてはそこまでかと思う。限界を決める必要はないと意見があるかもしれないが、県全体で施策に取り組んで行くことで、愛知目標の達成に繋がり、大きな流れとしてそういう方向にもって行ける。それが県の戦略なのかと思う。

(服部委員)

もし、そうであるなら、市町の戦略作成をもっと応援するとか、何年までに県内の全市町で戦略を策定することを応援するとか、指示するとか、ということを書き込まないといけない。

(自然環境課長)

P 87の数値目標で平成20何年までに全市町で策定と書きたいが、市町が策定することなので、この戦略に基づいて県内全市町で策定されるよう協力していきますと、戦略の効果的推進の第4章の「市町との連携」で書いている。

(服部委員)

そこはもっと強く言わないといけない、市町が策定することが重要であるなら、例えば、環境基本計画のなかで戦略をつくらうとしている市町もある。基本計画ではなくて、生物多様性地域戦略として策定されるように、この戦略の中に書き込まないといけない。まだ全然動いていない市町もあるが、そういうところに強力な指導を行わないといけない。それから、有馬富士公園、一庫公園、明石の金ヶ崎公園、三木山森林公園などで公園レベルの戦略づくりをやっている。公園レベルでの戦略づくりもあり得ることも入れたら良い。

(自然環境課長)

例えば、中瀬委員から提案があった、県の地図に市町の戦略策定状況とか、一庫公園の戦略、三木山森林公園の戦略などを地図に書き込むのも一つの方法と考える。その中に企業の名前は入れるかどうかはあるが、そこは検討させていただきたい。

(佐々木委員)

武庫川でもあったように、流域ごとの評価というものも重要かと思う。その中に各市町のもが入ってくる。地図の中で、そういう視点、評価を行う。P 87を見ると市町との連携だけになっているので、流域ごとの連携の中に、市町との連携があった方が現実的ではないか。

(服部委員)

生物多様性基本法の中に、県だけではなくて、市町も策定しようとなっている。現実には、流域という単位でとらえるとわかりやすいが、流域の中で捉えるという構造になっていない。市町というレベルであれば取り組める。生物多様性基本法ではそういうことが書かれている。

(佐々木委員)

地図の中に流域のラインを入れるとわかりやすいと思う。

(中瀬委員)

流域のラインを入れれば良い。また、広域連合のことも少し意識しても良いのかもしれない。

(自然環境課長)

市町の策定状況については、P 119の参考資料で神戸市以下記載している。全市町で策定してもらいたいと考えるが、各市町で温度差があるので、働きかけは進めていくが、県がつくれと言えるものではない。生物多様性を守る中で、こういうものがないと市として取組が進まないということを働きかけて行く。

NPO等の取組もP 121以下にあるが、これを全て地図に落とし込むのは厳しいかと思う。

(中瀬委員)

1章、2章で日本の年中行事と植物とあるが、これを県民の皆さんが見る時に、出来れば写真を入れるなど工夫をすると、門松の写真を見て親しみがでる。また、兵庫県下

に生物多様性を代表するような場所がある。円山川の湿地とコウノトリとか、氷ノ山のブナ林とススキの多様性とか、猪名川の里山林とか、播磨のため池群とか、瀬戸内の干潟とか、そういうものを1章、2章あたりで、兵庫県にはこんなものがあるというのをちりばめることができないか。写真だけでもあれば凄く良い。

(福岡部会長)

大変良い提案だと思う。この戦略はどのくらい配布するのか。広く周知しないともったいない。

(服部委員)

P89の外来生物対策について、環境部局でされていることが書かれているが、外来生物について、県土整備部から通知が出たが、そういう県土整備部から外来種対策の指針が出たということを書くと、もっと強力になる。河川の水辺の調査、基本的な調査が今も継続されている、農林でやっているいろいろな事業を書き込めないか。結局、環境部局は直接事業をやっていないので、事業をやっているところにどう動いてもらうかで、やっていることを取り込んで、示していくことが大切と思う。

(角野委員)

言葉のことで、グリーンツーリズム、エコツーリズムとある。何が違うのか、どう理解すれば良いのか。

(自然環境課長)

用語解説のなかで、エコツーリズムは旅行者が地域の環境や生活や文化に悪影響なく触れ、それらの体験を通じて学ぶ旅行、滞在型観光等。価値的、経済的に地域の振興に繋がることも目的に含む。グリーンツーリズムは緑豊かな農産漁村地域において、その自然、文化、人々との交流と楽しむ滞在型の余暇活動のこと。海外では一般的にアグリツーリズムと呼ぶ。簡単に言うと環境創造協会で作るのが、エコツーリズム、みどり公社で作るのがグリーンツーリズムということ。

佐々木委員から温暖化の話があった。戦略の中にも生物多様性で温暖化をどう捉えるかというのがある。基本的には温暖化とか、地球環境の問題は、生物多様性を守る前提になると認識している。温暖化防止をやらないと生物多様性が壊れる。ただ、それについて生物多様性の中で書き込めるのかというと少し難しい。生物多様性を支えるために温暖化対策があって、これは節電など企業の協力や取組みも含めて、国のCO2の削減目標や県の削減目標があって、そういったことに支えていただいて、その上に生物多様性は乗っているのかなと思う。この戦略の中では、温暖化防止計画の取組で、生物多様性は支えられているという観点、温暖化の話は生物多様性でどうかできるものではないと思う。

(佐々木委員)

ここに書いてあるので良いのかなと思った。書かれている場所の問題。温暖化に関係する部分で消しているところがあった。P22の兵庫県における地球温暖化の兆候が消してあって、これはどういう評価で消して、どういうところへ反映したのかと思った。

(自然環境課)

一つは、第4の危機で、以前は地球温暖化による危機とされていた。それが今回国の戦略でも変わった。温暖化に伴っているいろいろな事象が起きている。フロンガスによるオゾン層の破壊の話も入り、ここは地球温暖化だけではないと削除した。感覚として、温暖化に伴って、生物が絶滅するのではなく、温暖化に伴って、台風が起きたり、集中豪雨が起こったり、河川が氾濫して生態系そのものが流されてしまうといったこともあるので、そういう観点から書いている。温暖化があるから、そうなったということではなく、そういう意味で削除した。間違いだから消したのではなく、もっと広い観点から捉

える必要があることから温暖化だけをとらえて書くということではないとした。

(佐々木委員)

武庫川流域委員会で、議論したときに気象庁の方を呼んでお話をお聞きしたときに、武庫川流域のどこかのゾーンで大雨が降りやすい所があってかなり危ないと。温暖化によって豪雨が降るのではないかと、危機的な状況にあると聞いた。そんなに沢山書く必要はないと思うが、県の特徴くらいは書いても良いのではないかと。

(自然環境課長)

兵庫県の地球温暖化の特徴を把握していないので、少し調べて記述する必要があるれば記述していく。ただ、地球温暖化だけを切り口にするのではなく、生物多様性をもう少し広い範囲で捉えていることをご理解いただきたい。

(中瀬委員)

日本の子どもの学力が上がったとニュースで騒いでいるが、ゆとり教育を脱却したらすぐに日本の教育の学力が上がったとは思えないが、土曜日まで授業しようと、これから環境学習の時間がなくなるかもしれない。そこら辺も含めて、どう対応するか考えないと危なくなってきた。

(栃本委員)

P4の赤字がついているところで、体験学習が消されているがどういう考えで消されているのか。体験というのは非常に大事なものだと思し、環境学習・教育とするのではなく、環境を知るといった表現の方が良いのではないかと。環境を知る。環境の中に取り込めると。そういうことが大事なのではないかと。

(福岡部会長)

環境は体験するのが出発点。

(服部委員)

兵庫県で行っている小学校3年生で行う環境体験学習を意識して、事業名を書いているのではないかと。環境体験学習事業。

(中瀬委員)

地域において、体験等を通じた環境学習、教育の取組み。なぜ、環境学習・教育になったかという、兵庫県では、環境教育委員会というのを置いていたが、その委員会で学習・教育を議論した。それで兵庫県だけ、環境学習・教育となった経緯がある。画期的なこと、日本国では環境教育としか言わない、兵庫県は環境という文字が入っている。ということでこれは残してもらって、体験等を通じたとすればよい。

(自然環境課)

P48に7番として環境学習・教育の推進で、その中で体験型環境学習という言葉は出て来ている。

(服部委員)

中瀬委員言われた環境学習・教育ですが、小学校3年生の環境体験学習を見ると、伊丹の小学校の子どもが三田に来たり、日本海へ行ったり非常に遠隔地でやっていることが多い。そういうことをするから時間が無駄になる。地域に根ざした、例えば、伊丹の子どもなら伊丹でやる。地域の中でやるということをしなから、一過性のものになってしまう。

(中瀬委員)

それは、コーディネーターがしっかりしている県民局とそうでないところの違い。淡路では即地域でやっている。それは県が入ってコーディネーターしている。

(佐々木委員)

先程のところ、P4は目標なので、「体験」というキーワードを入れた方が良いでしょう。

思う。

(自然環境課)

部局に照会して修正しているところなので、確認させて頂く。

(角野委員)

第2章のP12で「2生態系サービスとは」とあるが、「3生物多様性がもたらすめぐみ」が出てくる構成になっている。生物多様性がもたらす「めぐみ」と「生態系サービス」はある意味同じ、これをそれぞれ分ける構成になっているが、この構成は理解できない。これはまとめることはできないのか。前回、「生態系サービス」の語感がよくないので、「めぐみ」としたいという話があった。「生態系サービス」を「めぐみ」と呼ぶということはどこかに書けば良いので、これをそれぞれ独立させる必要があるのか。

(佐々木委員)

3番目の生物多様性がもたらすめぐみの次ページに、2でもあったのと同じ「調整サービス」とか「供給サービス」とか具体的に細かいことが書いてある。これは、2番の生態系サービスの括弧の説明になっているのではないか。3番だけ違うものに見える。

(福岡部会長)

確かに、前回、「生態系サービス」という言葉に抵抗があるということで、「めぐみ」にするといったことがあった。「サービス」を括弧にするか「めぐみ」を括弧にするかといったことで統一されても良いかと思う。

(中瀬委員)

2番のタイトルを3番にもってくれば良い。それで、「生態系サービス」のことを「めぐみ」というと説明をすれば良い。

(自然環境課長)

実は、「生態系サービス」の中で、いろいろなサービスがあると書き始めたが非常にわかりにくいということが中でも議論になった。例えば、気候調整とか、洪水抑制力とかいわゆる調整サービスの部分が、生物多様性が直接的ではなく、間接的、どちらかというところ、土壌を形成したり、気候を緩和したりとか間接的なことであって、直接、戦略の中で生物多様性の「めぐみ」について書くには、書きにくいという議論があった。「生態系サービス」というのがミレニアム生態系評価の中で出されたというのは、一つの考え方として、生物多様性の考えにそれを戦略の中で書きすぎると直接的な生物多様性の「めぐみ」なのか、間接的なものか非常にわかりにくいという議論があった。ただ、ミレニアム生態系評価の中でも「生態系サービス」という言葉が使われ、その概念としてこんなものがあると。我々が直接的に受けるのは「めぐみ」としてこういったものがあるという整理にした。ただ、生物多様性を支える概念として「生態系サービス」がある。それは何らかの形で紹介しておかないといけないと取り入れている。

(中瀬委員)

だから、「めぐみ」を大きな概念にされて、分かり難いといった方には、「生態系サービス」はこのように書かれていると客観的にどこからか引用した方が良いかもしれない。これは兵庫県でどうこういう議論ではなくて、いわゆる「生態系サービス」がこう定義されていると。兵庫県では「めぐみ」ということで整理する。いろいろな学会で言われていたことが全てここに取られたということ。

(山口委員)

ひとつ確認させてほしい。先程、いろいろ細かいところがあって、関係部局と意見調整されながらやっている、もう一度見せてもらって意見を出すということで良いか。

(自然環境課長)

まだ校正もできていないところもあるので、修正したものを委員の皆様に見て頂いて、

御意見いただいたものを最終的に部会長に確認していただくことにしたい。委員の皆様よろしいか。

(福岡部会長)

一通り皆様に見ていただいて、取りまとめて、最後に私が見るということ。

市町レベルで戦略を作って実際に動いているところはあるのか。

(服部委員)

西宮市はすごく動いている。

(福岡部会長)

市町レベルでやってもらうのが本当。

(服部委員)

県レベルでは大きい。市町レベルでやるとかなり具体的なことになる。市町レベルできっちりやってもらってと、そういう展開になるのが良い。

(福岡部会長)

まだ少し時間もありますが、もし、御意見あるようでしたら直接、事務局におっしゃっていただいて、今日はこのくらいでいかがでしょうか。

(自然環境課長)

生態系と種と遺伝子のところ、角野先生に個別にご相談させていただいてよろしいか。

(角野委員)

何か参考になる資料を届けるようにしたい。

(福岡部会長)

この辺で事務局にお返しする。

(自然環境課)

本日は、どうもありがとうございました。